一般論文
平成27年11月18日受理

富山県射水市海老江地区の曳山の音楽

The Music of the Parade Float Festival in Ebie, Imizu City, Toyama

● 島添貴美子／富山大学芸術文化学部
SHIMAZOE Kimiko / Faculty of Art and Design, University of Toyama
● Key Words: Parade Float Festival, Festival Music, 曳山祭礼、祭囃子

要旨

The purpose of this paper is to report and analyze the music of the parade float festival in Ebie（海老江）. Ebie is a port town located in Toyama prefecture. The parade float festival of Ebie began in about mid-19th century. The music is played with traditional Japanese flutes, drums and a little gong. And songs and dances are also played in the festival.

The music of the parade float festival in Ebie has a lot in common with the music of Hojozu（放生津）which is a neighboring town on Ebie. So the ensemble style and some of the music repertoires should be carried from Hojozu.

On the other hand, in Ebie, most characteristic is that the young people rolling the parade float really love to sing and dance in the festival. The song is called Kiyari（木遣り）. Kiyari is a traditional Japanese folk song. In some towns and villages on the coast of Toyama Bay, Kiyari is sung for parade float festivals or gala banquets. People living in Ebie say that Kiyari had been carried from Hokkaido to Ebie by herring fishermen.

This paper presents the classification of the music repertoires in Ebie; “Instrumental”, “Song” and “Instrumental and Song”. And the music analysis presents that Ebie picks some instrumental works up from Hojozu and arranges them uniquely.

1．はじめに

富山県射水市では、放生津（ほうじょうづ）（新湊）、海老江（えびえ）、大門（だいもん）の３地区で曳山祭礼が行われている。このうち本論で取り上げるのは海老江地区の曳山である。海老江曳山については、富山県教育委員会が昭和40年代に行った県内の曳山祭礼の悉皆調査の中で調査されているほか、平成23～26年度に射水市教育委員会が調査を行っている。調査成果は報告書として出版されている。富山県教育委員会では昭和51年に出版された『富山県の曳山』[1] の中で海老江曳山が概説されており、射水市教育委員会では、平成27年に出版された『富山県射水市　海老江加茂神社秋季祭礼の曳山行事　大門神社・枇杷首神社秋季祭礼の曳山行事　調査報告書』[2] で詳述されている。筆者は、射水市教育委員会の調査で、曳山囃子の調査を担当し、その成果の一部を報告書に収めたが、本論では、紙面の都合で報告書に書くことができなかった海老江曳山の音楽的特徴を中心に論じる[*1]。海老江の曳山囃子の調査は、放生津と大門における調査と並行して、平成23年９月13日（東町）、14日（西町）、16日（中町）と、平成26年９月９・23日（西町）、10・23日（中町）、11日（東町）に、各町の公民館での聞き取り調査、平成24年と平成26年の秋季祭礼での調査のほか、平成26年８月と12月に個別の聞き取り調査を行った。本論はこれらの調査成果と提供いただいた資料に基づき分析し考察する。

海老江は北前船交易で栄えた港町で、戦後まで漁師や薬売りが多くいた。海老江曳山の創始は不明だが、海老江における北前船交易の最盛期にあたる江戸後期の天保12~15（1841～1844）年頃と考えられる[3]。富山県内における現行の曳山祭礼の中では大門に次いで創始の新しい曳山である。

曳山祭礼は、海老江加茂神社秋季祭礼として行われている。秋季祭礼は現在、９月の秋分の日に行われており、前日の前夜祭（宵山）、当日の例大祭、御輿渡御、曳山巡行、獅子舞、成就祭のほか、直近の日曜日に子供御輿が出ている。海老江加茂神社の氏子は東町、中町、西町、浜開（はまびらき）の４地区である。東町、中町、西町からは曳山を、浜開から獅子舞を、そして各町から子供御輿を出している[4]。

海老江の曳山囃子は放生津と多くの類似点がみられる一方、明治後半には木遣り歌を取り入れ、柔軟に囃子や祭りを変化させるなど、海老江ならではの特徴がみられる。本論では、まず、曳山囃子の楽器の編成、「木遣り」など曳き子による歌を含めた曲目を概説し、次に伝播と伝承のあり方について音楽分析を交えて論じる。

2．囃子の楽器編成

海老江の曳山囃子の編成は、笛、太鼓、鉦（かね）である。山の中では、太鼓１人、笛２～３人、鉦１人（東町、西町）の編成で演奏する。笛の調子、太鼓とバチ、鉦の形状は放生津と同じだが、三味線は使わない。表１は各町の楽器を計測し、情報をまとめたものである。以下、表１に基づいて楽器の特徴を概説する。

（1）笛

笛は長さ45センチ程度の篠竹の横笛（篠笛）で、吹口１つ、指孔６つである。中町と西町は新月製[*2]、東町は囃子方の方が作った笛を使用している。現在、中町と西町は６本調子、東町は５本調子で、放生津と同様に獅子舞（７本調子）と曳山で笛を使い分けている。５本調子の笛は、笛の端に最も近い指孔のみを開放した時の音がC（ド）音になる調子の笛である。６本調子は５本調子より半音高く（C#）、７本調子はそれよりさらに半音高い（D）。

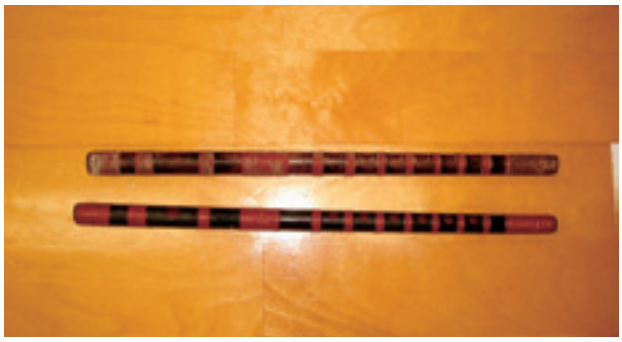


写真１　笛（海老江西町）

笛の調子は時代によって変遷している上に、町によって変遷の仕方が異なる。東町では、昔は曳山（５本調子）と獅子舞（７本調子）で笛を使い分けていたが、ある時期、同じ笛（７本調子）を使うようになり、30年前に再び曳山で５本調子の低い笛にしたという[*3]。一方、中町では、昔は獅子舞と同じ７本調子のものを使っていたが、平成10年以降に笛を新調した際、６本調子で揃えたという[*4]。

笛の奏法は、笛の端に近い指孔から１、２、３、４、５、６とすると、常に指孔３をふさいだ状態で吹くのが基本である。使用する音域は２オクターブで、６本調子の笛の場合の基本的な構成音は、下からA#・C#・D#・F#・G#／A#・C#・D#・F#・G#／A#である。ただし、西町は最高音だけが半音上がるので、A#・C#・D#・F#・G#／A#・C#・D#・F#・G#／Hとなる。西町の最高音が半音上がるのは運指法の違いである。東町

表1　海老江曳山囃子の楽器

＊長さの単位はmm

楽器名＼町名		東町	中町	西町
太鼓	小太鼓の個数	3	4（以前は3）	4（以前は3）
	小太鼓の音の並び（左から）	高→低（ＨＡＧ）右端の一番低い小太鼓と大太鼓がオクターブ（古い方：低→高。二上りに調整。左が低い、左と中は5度、左と右はオクターブ　大太鼓と真ん中の小太鼓も5度）	低→高（ＧＤＧＡ）	低→高（ＧＡＣＤ）右端の一番高い小太鼓と大太鼓がオクターブ
	小太鼓の直径	185（古い方：165）	左から203、180、150、149	左から 185、170、155、140
	小太鼓の厚さ	93（古い方：90）	85	155
	大太鼓の直径	640（古い方：565）	595	670
	大太鼓の厚さ	235（古い方：193）	180	320
	太バチの全長	410	420	380
	太バチの素材等	かたぎ。玉の部分を野球ボールでくるみ、鹿皮で包む。	柄は木製で、頭の部分を皮で包む。	柄は木製で軽い。頭の部分を皮で包む。浅野太鼓製
	細バチの全長	670	800	717
	細バチの素材等	籐、黒いビニールテープを巻き、頭の部分に皮を被せて紐でとめる	籐、一部、ビニールテープを巻く	竹、やや幅がある。浅野太鼓製
	枠	幅1035　高さ1180	幅925　高さ1125	幅990　高さ1220
	備考	浅野太鼓製、平成25年9月に製作、枠は藤平氏からの寄贈。バチは大（おお）バイ、小（こ）バイという。（古い方：大門でつくった。昭和23年と胴にかかれている。細いバチ：紅白のビニールテープを全体に巻いたもの。）	大太鼓の胴に「昭和六十年八月吉日」とあり。「越中大門荒定」の焼印あり。大太鼓と左端小太鼓の音高はオクターブの関係。	太鼓は浅野太鼓製、平成20年3月に購入。バチは、浅野太鼓から一緒に買った。細いバチは買ってから、曲げた。
笛		笛は新月のもあるが、囃子方の米原さんが作った楽器を使っている。 5本調子（全長450、吹き口と指孔150）	新月6　全長450、吹き口と指孔140	新月6 全長440、吹き口と指孔140 新月乃笛先代製作の笛　全長430、吹き口と指孔140 ・練習用のダクト付の笛もある
	装飾技法の名称	なし	チャリ（キザミ）	なし
鉦	鉦の直径	外径210、内径176	外径186、内径174	外径135、内径112
	鉦の厚さ	48	30	23
	バチ	全長215	全長300	全長435
	枠	高さ415、幅255	高さ310、幅268	高さ520、幅225
	備考	―	―	浅野太鼓製、バチは手製。
三味線		なし	なし	なし

と中町の最高音は、指孔３のみを押さえて残りの指孔は開放するが、西町では指孔３、４、５を押さえるためである[*5]。こちらの方が、高音が出やすい代わりに、指孔３のみ押さえる音よりも半音高くなる。

囃子の曲の音階は、A#－D#とD#－G#の４度枠が強いので、小泉文夫のテトラコルド理論[5)]でいう民謡テトラコルドのコンジャンクト形といえる。

（2）太鼓と鉦

太鼓は、鋲打ち平胴で、放生津と同様に、大太鼓１個に小太鼓３～４個を１つの木枠に入れて使う。かつて、大太鼓は獅子舞の太鼓と兼用だったようだ（東町、中町）が、現在では、各町とも獅子舞の太鼓とは別である。太鼓は浅野太鼓製[*6]（東町、西町）だが、少し古いものは大門の太鼓屋[*7]のもの（東町、中町）である。小太鼓は、以前は３個だったが、中町と西町は新調した際に４個に増やしている。小太鼓の音高は一つ一つ異なる。中町と西町では、胴の大きさ（膜面の直径）の違いによって音高の差をつけて、左から右に低音から高音に並んでいる。それに対して、東町は胴の大きさは同じで、皮の張り具合で音高の差をつくり、右から左に低音から高音になるように並んでいる。

写真２　太鼓（海老江西町）

バチも放生津と同様に、太いバチと細いバチの２種類があり、曲によって使い分ける。太いバチは、木製の柄で頭の部分を皮で包んだものである。細いバチは、藤製（東町、中町）か竹製（西町）で、ビニールテープを巻いているものもある。

写真３　太鼓のバチ：手前から太いバチと細いバチ（海老江東町）

鉦も放生津と同様に、木枠に固定し、鹿の角等の頭のついたバチで、鉦の凹んだ部分をたたく。

写真４　鉦（海老江中町）

３．曲の数と分類

海老江の曲の特徴は２つある。１つは、放生津と同じく曲数が非常に多いことである。現行の曲だけでも、東町24曲、中町と西町各26曲を数える。これは、放生津[*8]と同様に、町の住人と出身者を中心に囃子方と曳き子を務める自前方式をとっているゆえに、自発的にいろいろな曲を取り入れられるからだろうと思われる。

２つ目の特徴は、歌う曲の数が全体の約３割を占め、周辺地域に比べて多いことである。海老江は、放生津と大門に比べて、曳き子がよく歌うだけでなく、いろいろな歌を取り入れている。

海老江の曳山囃子は、楽器編成だけでなく、曲も放生津から取り入れたと思われる類似のものが多い。その反面、放生津よりも歌う曲が多い。そのため、放生津における曲の分類方法をそのまま適応するには不都合が生じる。そこで、ここでは楽器のみの合奏である囃子の曲だけでなく、歌も含めた海老江独自の分類方法を提示する[*9]。

表２は海老江の曳山で演奏される曲を、囃子と歌の２つの要素を組み合わせて、「囃子」、「歌がつく囃子」、「歌」の３つに分類したものである。「囃子」は楽器の合奏で歌がつかない曲、「歌」は「木遣り」など、歌が主となっている曲である。これらに対して「歌がつく囃子」は、放生津なら「雑曲」[*10]に分類される囃子だが、海老江では囃子が「歌がつく囃子」の曲を演奏すると必ず曳き子が歌い始めるだけでなく、逆に曳き子が山の巡行時に歌いたくなると歌い出す曲である。これは「木遣り」が、山が停まっている時に歌うのと対照的である。また、「囃子」が山の動いている時に演奏され、「歌」が山の停まっている時に歌われるのに対して、「歌がつく囃子」は山が動いているときに歌われる囃子である。そこから、「歌がつく囃子」は「囃子」と「歌」の中間に位置する。

表2　海老江曳山曲目リスト

＊1　曲名ではなく、笛の旋律が同じもの・類似しているものを同じ曲として並べた。
＊2　「演奏の機会」欄には、3町に共通するものだけを記入。町ごとに異なるものは各町の曲名欄に付記した。

分類	細目		海老江東町	海老江中町	海老江西町	演奏の機会	放生津と類似する曲	その他取り入れた曲
囃子	本囃子		本囃子 ・町に入る時	本囃子 ・各町に入る時 ・木遣りの伴奏として	本囃子（1番～8番） ・浜側の道を最初に通る時。旧道。 ・1～8番を通した後、2～8番を繰り返す。 ・祝いの木遣りの伴奏として			
			銀囃子 ・逆戻りの時（自分の町）	銀囃子 ・本囃子とセットで ・木遣りの伴奏として				
	雑曲	機能的な曲	御神楽	御神楽	御祈祷	神社での祈祷の時、山倉の前		
			ハナ ・カーブの後に演奏する時は特に名称がない	ちんちこ ・カーブの後は「稚児神楽囃子」という	ちんちこ	ご祝儀をもらう時、カーブの後、山を停める時	ちんちこ	
			カーブ	いやさか（弥栄）	カーブ	角を曲がる時	いやさか（弥栄）	
			勝ち閧（かちどき） ・約30年前よりカーブの後にいつも付けている。	勝ち閧（かちどき） ・うまく曲がった時、見どころで歌う ・80年代に、伏木上町（かんまち）のレコードから取り入れる。歌が付いたのは平成2年頃。				伏木（高岡市）曳山曲
					露払い	からくり		
					千秋楽	からくり		
		巡行・余興の曲	曲がり囃子	まがりばやし	まがりばやし	かつて角を曲がる時に使われた曲か？		
			エーベ（海老江）の浜中 ・夜、町へ帰る時	え～べの濱中 ・昔は、町へ帰る時に歌いながら	え～べの浜中 ・旧道、浜に近い方の道で			
			新湊銀囃子	新湊銀囃子	見渡せば ・戻る時 ・からくり ・木遣りの伴奏として		銀囃子	
			おっぺけ	おっぺけ	おっぺけ ・からくり		おっぺけ大佐	
			らんまる	らんまる ・木遣りの伴奏として	らんまる		ちゃちゃりこ	
			だるまくずし		新湊		達磨くずし	
			しのだの杜	しのだの森 ・木遣りの伴奏として	しのだの森			流行り歌「ハイカラ節」
			とうべえ様		戻り山囃子1番 ・戻る時 ・からくり		戻り囃子の一部	
					戻り山囃子3番 ・戻る時 ・からくり		戻り囃子の一部	
				とうべえさま ・木遣りの伴奏として	とうべさま ・からくり		戻り囃子の一部	
				さーさばやし ・木遣りの伴奏として	さーさばやし		戻り囃子の一部	
			見渡せば（たちばな）		見渡せばその2 ・途絶えていたのを復活させた		見渡せば	
				たちばな ・木遣りの伴奏として	たちばな		見渡せばの一部	
歌がつく囃子			宮づくし ・かつては「一番はじめ」といっていた	一番はじめ	一番はじめ		宮づくし	
				かぞえうた(一つとや)				
			桃太郎（替え歌）	桃太郎				
			もしもし亀よ	もしかめ(うさぎとかめ)	亀			
			ノーエ節	ノーエ節	富士の白雪			
			こきりこ	こきりこ	こきりこ			
				こんぴら				
			浦島太郎（替え歌）					
			夕焼け小焼け	夕焼け小焼け	夕焼け小焼け			
					納め ・最後に加茂神社から山倉までの道中で歌う			
歌	木遣り		木遣り（75調）	木遣り	木遣り	町の端、祝いの家		
			鰊場木遣 ・10年ほど前に北海道へ旅行にいった青年団員が聞いた歌を取り入れた					
	歌のみ（囃子がつかない）			帆柱網おこし(帆柱起し) ・平成に入ってから取り入れる				
				南部俵積うた ・平成元年頃に取り入れる				

（1）囃子

「囃子」は楽器の合奏で歌がつかないのが基本である[*11]。ここでは放生津と同様に「本囃子」と「雑曲」に分けた。ただし、実際には海老江ではこの区別は放生津ほど厳密ではなく、人によって区別の仕方にばらつきがある。

「本囃子」には、「本囃子」と「銀囃子」を入れた。どちらも小太鼓に細いバチを使い、大太鼓は、旋律の節目の部分にしか使わないことと、いずれの曲も旧道での山の巡行で演奏されるためである。「本囃子」は東町と中町では１曲として、西町では１～８番の番号を付けて８曲として扱われている。曲の長さは、東町10分、中町７分、西町12分程度であり[*12]、町によってばらつきがある。演奏する場面も町によって異なる（表２を参照）。東町では町に入る時に「本囃子」、逆戻りの時に「銀囃子」を演奏する。中町では旧道と他町に入る時に本囃子→銀囃子→雑曲の順で演奏する。西町では、浜側の道を最初に通る時と旧道で本囃子を演奏するが、最初１番から８番まで通した後、２番から８番を繰り返す。他方、３町に共通する特徴は、祝いのハナ（祝儀）の時の「木遣り」の伴奏として用いられることである。

「本囃子」は、町によって異なる部分と微妙に似ている部分がある。西町の「本囃子」は１～８番の各曲の前後に、大太鼓の「ドン」が入り、さらに２・７・８番は曲の途中にも「ドン」の２連打が１回入る。１番のように御神楽に似た曲は、他２町にはない。それに対して、「本囃子」を１曲扱いにしている東町と中町でも、大太鼓の「ドン」の２連打が曲の途中に数回挿入される。それを目安に分けると中町は５つ[*13]、東町は６つの部分に分けられる。

「銀囃子」は、東町と中町の持ち曲である。放生津に同名の曲があるが、海老江では、放生津の「銀囃子」を「新湊銀囃子」として伝承しており、笛の旋律を比較しても、海老江の「銀囃子」は放生津の「銀囃子」とは別曲といえる。「銀囃子」は「本囃子」と同様に小太鼓に細いバチを使うほか、途中で大太鼓の「ドン」の２連打が入るが、「本囃子」よりも軽快である。東町と中町ともに１曲扱いであるが、大太鼓の「ドン」の２連打を目安に分けると６つの部分からなる。

「雑曲」については、東町・中町が各13曲、西町が18曲ある。これらを「機能的な曲」と「巡行・余興の曲」に細分した。

「機能的な曲」は、神社や山倉の前で演奏される「御神楽」、ご祝儀を貰うときの「ちんちこ（ハナ）」、角を曲がる時の「いやさか」、曲がり終わった時の「勝ち鬨（どき）」がある。このほか、西町はからくりの実演があるため、その時に演奏される「露払い」「千秋楽」がある。

「勝ち鬨（どき）」は、中町では90年代前後に高岡市伏木の上町（かんまち）のレコードから取り入れたというもので、昭和40年生まれの青年団員が青年団を引退する年（平成２年）に歌を作って歌うようになった。取り入れた当時は、角を曲がったら２回繰り返していたが、それほど上手く曲がらなかった時は１回だけ、上手く曲がれなかった時はやらなくなったという[*14]。中町より前に、東町ではすでに、「勝ち鬨（どき）」が取り入れられていたようだが、取り入れた経緯は中町と異なる。

からくりの実演（西町のみ）では、「露払い」「千秋楽」を含む数曲をメドレー方式で演奏する。現在、からくりの実演における人形の動きは決まっており、人形の動きと連動したメドレーになっている。通常は、「露払い」（２回繰り返す）→「見渡せば」（２回）→「戻り山囃子１番」（２回）→「おっぺけ」（２回）→戻り山囃子３番（２回）→「とうべさま」[*15]（２回）→千秋楽の順である。これに「見渡せば」と「戻り山囃子１番」を省略した短いバージョンもある。

海老江ならでは曲としては、「曲がり囃子」「えーべ（海老江）の浜中」がある。「曲がり囃子」は、かつて曲がり角の手前で一旦、山を停車させ、山の前か後ろを持ち上げて向きを変えてゆっくりと角を曲がっていた[*16]時代に、角を曲がる前に演奏した曲[*17]だが、戦後になって、道路が舗装され放生津と同じように勢いよく山をまわすようになると、放生津の「いやさか」に取って代わられ、「いやさか」ではなく「カーブ」と言われるようになったと思われる。「えーべ（海老江）の浜中」は、中町では「えーべの浜中、イヤカロカ、来年まで収めた」という歌詞がついていて、歌いながら町に帰ってきたという[*18]が現在は囃子のみである。西町では、旧道や浜に近い道を巡行するときに演奏する。

「新湊銀囃子」、「おっぺけ」、「らんまる」、「だるまくずし（新湊）」は、放生津の雑曲をそのままとりいれた曲である[*19]。それに対して、「とうべえさま」、「戻り山囃子」、「さーさばやし」は放生津の「戻り囃子」の一部の旋律を、「たちばな」は放生津の「見渡せば」の一部の旋律をモチーフに使ってアレンジし１曲に仕立てた曲である。放生津では、「戻り囃子」は山が町へ帰る時、山をバックさせる時に演奏し、「見渡せば」は橋を渡るときに演奏される曲だが、海老江では放生津のような機能はなくなっている。この他、「しのだの森」は明治40年代の流行り歌「ハイカラ節（自転車節）」を曳山囃子化したものだが、歌はない。

（2）歌がつく囃子

「歌がつく囃子」は、放生津ならば余興の曲として「雑曲」に分類されるものだが、海老江では曳き子が必ずと

いっていいほど歌う曲である。「一番はじめ（宮づくし）」や「ノーエ節」は明治以降の流行り歌が放生津で曳山囃子化したもので、それが海老江に取り入れられたと思われる。他には「こきりこ」といった地元の民謡や、「もしもし亀よ」などの童謡がある。

（3）歌

歌は、「木遣り」と「歌のみ（囃子がつかない）」に分けた。「木遣り」は、伊勢のお木曳き木遣り歌の系譜の歌で、富山湾沿岸の市街地や集落の曳山祭礼や祝いの席で広く歌われている。富山県内では、海老江以外に富山市岩瀬の岩瀬諏訪神社春季例大祭（岩瀬曳山車祭）で歌われるほか、放生津では「おいやらもん」という名の祝い歌として伝承されている。

伊勢のお木曳き木遣り歌の系譜の歌とは、伊勢神宮の式年遷宮の際に歌われる木遣り歌が、漁の時の仕事歌や祝い歌に転用され、九州南部から日本海沿岸、太平洋沿岸、北海道南部の市街地や集落に伝播した歌[6)]を指す。一般に、日本海沿岸の伝播は北前船の影響が大きいと考えられている。

海老江での「木遣り」の伝承は、戦前、海老江から北海道へ鰊漁に出かけた漁師たちが伝えたといわれている。海老江での聞き取り調査では、「木遣り」の名人として、東町の関井仁助、中町の五十嵐甚作の名前が挙がったが、いずれも、鰊漁の漁師や関係者である。昭和30年頃に鰊がぱったりと来なくなったため、北海道の鰊漁はなくなったが、漁が盛んだった頃は、当時は9月3日だった祭りの日程に合わせて、鰊漁から帰ってきた漁師たちが山を曳いていたという[*20]。海老江中町の高林三昌氏（昭和11年生）によると、高林氏の父親（明治32年生）の頃には、木遣りはすでに祭りでうたわれていた[*21]ということから、遅くとも明治時代の後半には現在歌われている形の「木遣り」が曳山祭礼で歌われていたと推測される。

海老江の「木遣り」は山が停まっている時に歌われる。富山市岩瀬や能登半島の七尾、珠洲では山を動かす掛け声として「木遣り」が歌われるのとは対照的である。加えて、海老江の特徴として「木遣り」を歌うときに囃子方は「囃子」の曲から適当なものを選んで演奏するため、「木遣り」の旋律と囃子の旋律は全く異なるものが同時に演奏されることになる。中町では停車時の木遣りは、その時にやっている囃子をそのままやり続け、見どころ[*22]や祝いの家では「本囃子」を伴奏に使っているという[*23]。西町では、停車時は途中で中断しやすい「見渡せば」を使い、見どころや祝いの家ではある程度時間があるので「本囃子」を使うという[*24]。

「木遣り」の歌詞は最初の7語の句を反復する777調が基本のようだが、終わりの句が5語の775調の歌詞や、字余りの歌詞も多い。内容も北海道の「網起こし歌」の歌詞に近いものから、青年団が相談しながら作ったもの（東町）まである。

「歌のみ」は囃子が付かない歌で、中町青年団が平成に入って独自に取り入れたものである。町内曳きの時のハナが出た家で歌われる。

4．囃子の曲の取り入れ方

現行の曳山囃子の曲の多くは放生津の曳山囃子と類似している。海老江での聞き取り調査でも海老江では、放生津から曲を取り入れたと認識されている。分析の結果、取り入れられたとわかる曲は「雑曲」と「歌がつく囃子」に限られていることが分かった。

取り入れられた曲には、そのまま取り入れたものと旋律の一部を取り出してアレンジし1曲にしたものがみられる。そのまま取り入れた曲は表2の通りであるので、ここでは、旋律の一部を取り出してアレンジし1曲にした曲について述べたい。アレンジ元になっている旋律をもつ曲は、放生津の「戻り囃子」と「見渡せば」の2曲[*25]に限られている。そこで、本節では放生津の「戻り囃子」から派生した曲を例に、海老江ではどのように旋律の一部がアレンジされているのか、音楽分析によって明らかにする。

海老江では、放生津の「戻り囃子」の旋律の一部から派生した曲として、「とうべえさま」（3町共）、「戻り山囃子1番」（西町）、「戻り山囃子3番」（西町）、「さーさばやし」（中町・西町）の4曲がある。表2にあるように、笛の旋律をみると、東町の「とうべえ様」と西町の「戻り山囃子1番」が同曲、中町の「とうべえさま」と西町の「とうべさま」が同曲、中町と西町の「さーさばやし」が同曲である。そこで、4曲すべてをもっている西町と放生津（古新町（ふるしんまち））の「戻り囃子」を比較する[*26]。

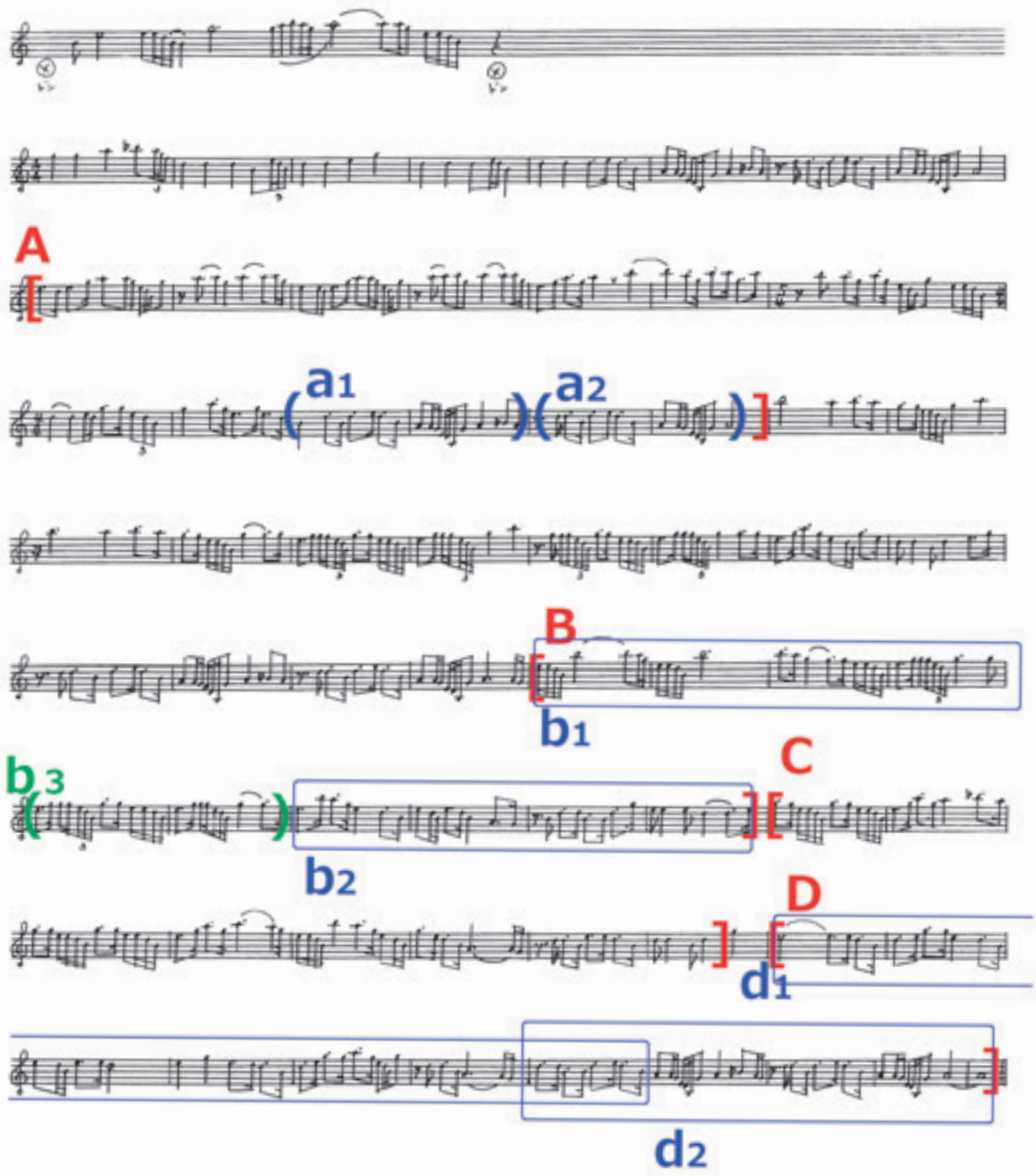
譜例1は放生津（古新町）の「戻り囃子」、譜例2は「戻り山囃子1番」、譜例3は「戻り山囃子3番」、譜例4は「とうべさま」、譜例5は「さーさばやし」である。譜例2から5はいずれも西町の譜例である。譜例1にあるフレーズA、B、C、Dが、それぞれ、譜例2、3、4、5の元となっている旋律である。

まず、譜例1のAと譜例2「戻り山囃子1番」を比較する。譜例1のAは終わりの部分が反復しており、これをa1とa2とする。a1とa2はバリアンテ（変型）の関係なので、Aは終わりのフレーズがバリアンテをもって反復している旋律である。

これに対して、譜例2「戻り山囃子1番」はAとA'に大きく分けられる。A'はAのバリアンテである。AとA'を比較すると異なる点は、Aの前半の旋律x1と、

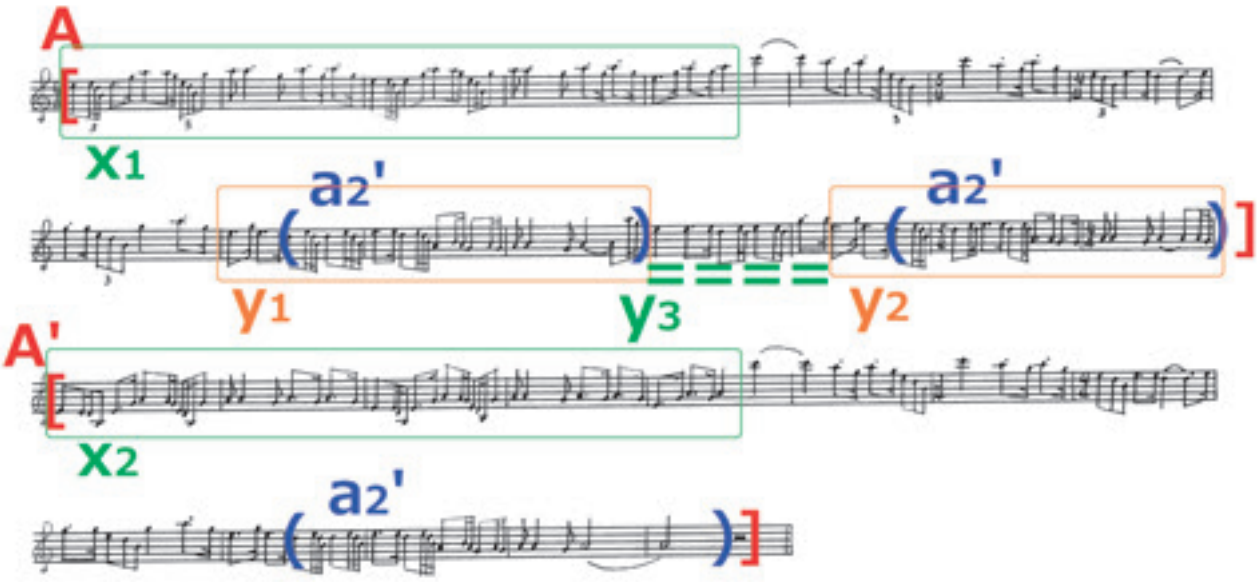
譜例1　戻り囃子［放生津（古新町）］

＊実音は長2度低い

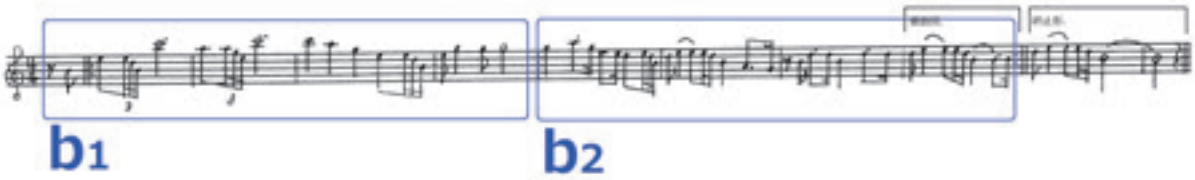


譜例 1

譜例2　戻り山囃子1番［海老江西町］　＊譜例2〜5の実音は半音低い

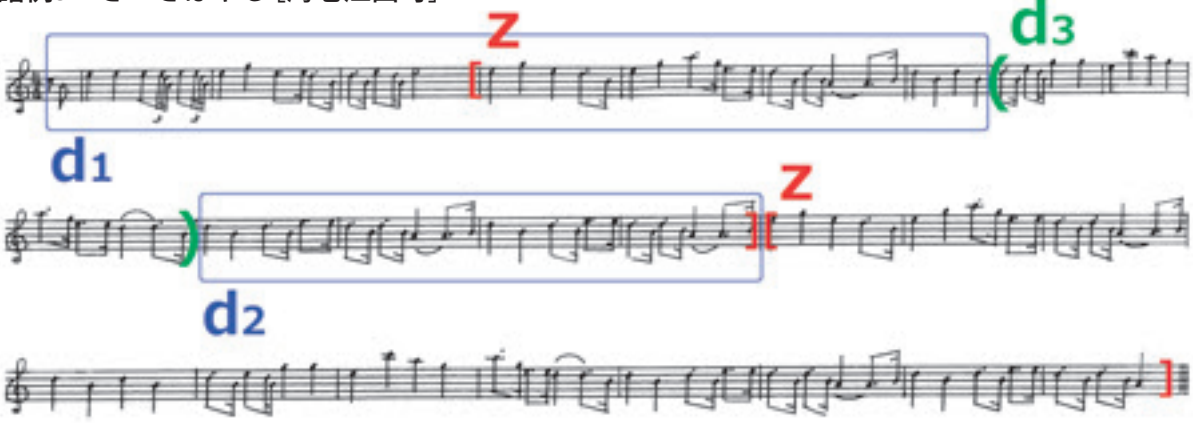


譜例3　戻り山囃子３番［海老江西町］



譜例4　とうべさま［海老江西町］

譜例5　さーさばやし［海老江西町］



譜例２

A'の前半の旋律x2は、１オクターブ違いの同じ旋律であることと、Aの後半の旋律はy3を挟んでy1とy2のバリアンテの反復であるが、A'は反復なしであることである。逆にいえば、それ以外の部分はAとA'は同じといえる。

さらに、譜例１と譜例２の旋律Aを比較すると、譜例１のAは終わりの部分にa1とa2の反復があり、譜例２のAは終わりの部分にy1とy2の反復がある旋律である。まず、aとyを除く前半部分の旋律を比較すると、ほぼ同じである。次にaとyの部分を比較すると、yは譜例１のa2と似た旋律a2'を含んでいる。譜例１よりも譜例２の反復の方がy3の旋律を含んで、より複雑なバリアンテの反復になっている。そして、A'との関係をみると、前述のように、前半部分x2はx1の１オクターブ下のバリアンテであり、加えて、終止形にa2'を含んでいる。このように、譜例２「戻り山囃子１番」は、譜例１放生津の「戻り囃子」の一部の旋律を拡大させて１曲としていることが分かる。

次に、譜例１のBと譜例３「戻り山囃子３番」を比較すると、譜例１のBの真ん中あたりにあるb3より前の旋律をb1、後の旋律をb2とすると、譜例３はb1＋b2で構成されている。言い換えると、譜例３「戻り山囃子３番」は、譜例１のBのb3の部分を省いた曲といえる。

次に譜例１のCと譜例４「とうべさま」を比較すると、譜例４の最後の音符が長い以外は、同じ旋律である。

最後に譜例１のDと譜例５「さーさばやし」を比較する。譜例５「さーさばやし」は、zの部分が同じ旋律である。つまり、一部分が反復している曲である。そこで後半の反復部分（15小節目から終わりまで）よりも前の部分（１小節目から14小節目）と譜例１のDと比較する。すると類似する旋律が２か所ある。これをd1とd2とすると、譜例１では、d1とd2は一部重なっているのに対して、譜例５は、d3をはさんでd1とd2がある。つまり、「さーさばやし」は元旋律をd1とd2に分割して、その間にd3の旋律をいれてアレンジしているといえる。

加えて、西町については、１世代前の録音[*27]が残っており、分析の結果、下記のことが明らかになった。西町の現行の囃子では、「戻り山囃子」は１番と３番しかないが、１世代前の録音には、１番から６番まである。１世代前の録音から２番、４番、５番、６番を採譜して比較した結果、下記のことが分かった。まず、「戻り山囃子２番」は反復の仕方に違いがあり、変拍子になっている部分もあるが、元は「さーさばやし」と同じ旋律の曲である。そして「戻り山囃子４番」は放生津の「見渡せば」と、「戻り山囃子５番」は放生津の「だるまくずし」と、「戻り山囃子６番」は放生津の「戻り囃子」と類似した曲であることがわかった。

このように、放生津の「戻り囃子」は、西町では「戻り山囃子６番」として、そのまま受け入れられたこともあったが伝承が途絶えている。しかし、同時に、「戻り囃子」の旋律の一部を使ってアレンジして作られた曲が４曲もあり、西町では４曲ともに伝承されている。このうち表２のように西町の「戻り山囃子１番」は、東町では「とうべえ様」として、西町の「とうべさま」と「さーさばやし」は中町でも同名で伝承されている。また、西町の「戻り囃子２番」、「戻り山囃子４番」、「戻り山囃子５番」は、それぞれ、「さーさばやし」、「見渡せばその２」、「新湊」と曲名を変えて伝承されていることが明らかになった。

５．伝承と伝播

表２の海老江の曳山囃子の曲をみると、同名異曲や異名同曲のものがみられるほか、町によって使われ方が異なる曲や、その町独自の曲が少なからずある。これは、各町それぞれが、取り入れた曲を自分のものとしていった結果といえるが、見方を変えれば、戦後の囃子伝承の危機と昭和50年代の囃子方復興の努力が大きく影響しているように思われる。海老江では、現在の50才手前～60才代に囃子ができない世代が生じており[*28]、昭和50年代に小学生で習い始めた現在の40才代が囃子方の指導的役割を果たしている。

中町や西町では、戦後まもなくの時期に囃子方が高齢化し、伝承の危機が生じている。

> 中町では、昭和35年にいったん途絶え、テープを流している時期があったが、昭和54年頃、当時、引っ越して射水市七美におられた清水先生にきてもらい、３人で笛を習った。きっかけは、それより前に獅子舞の笛を始めていて、山の笛もやろうということになったからである。清水先生が書いた譜面があり、山の中に貼って吹いていた。笛と大太鼓は獅子舞と同じものを使った[*29]。

> 西町では、昭和55年頃に、笛の名手だった辻隆男氏ほか、当時の60才代の人２～３人が小学生に教え始めた。４年生以上の子供たちで、各学年１～２人くらいいた。「教わるというよりは見て覚える」もので、辻さんたちがいなくなると、中学生が小学生を教えるようになった[*30]。

こうした状況から、昭和50年代に３町合同で始めたのが、小学生を対象とした曳山囃子の教室である。公民館活動として実施された「一人一文化活動」の一環として、夏休みの２週間で行われていた[7)]。聞き取り調査で

は、「芸能教室」といったり「芸能学級」といったりと呼び名が異なるが、ここでは「芸能教室」で統一する。芸能教室は中町の大人が中心となって立ち上げ、各町から囃子方の大人たちが先生となって指導した。

当時、小学生で芸能教室に通っていたという中町の高林三智氏（昭和44年生）によると、

> 児童クラブの活動の一環で、芸能教室といって、３町の小学４年から中学３年までの子供たちを集め、夏休みを中心に、清水先生が教えていた。教えていた囃子は中町のものだった。芸能教室とは別に、町内でも囃子の練習があったが、当時の青年団は木遣りの練習のために公民館にきていたから、芸能教室で習ったことを子供同士で教え合いながら練習していた。（中町は）しばらくの間、子供だけの囃子だった時期もあって他町との差がありすぎた。[*31]

芸能教室ができると、それをきっかけに西町でも子供たちが、町の囃子の練習に加わるようになったという[*32]。

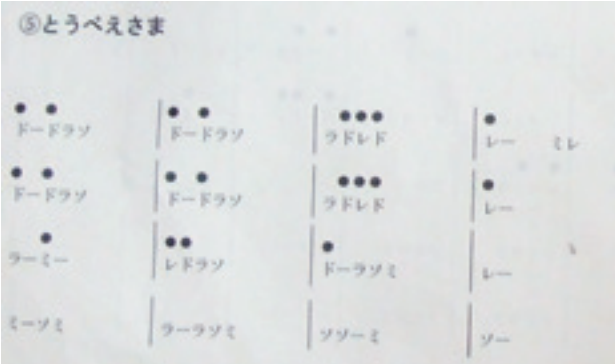


写真５　芸能教室のテキスト（笛と太鼓の譜）

その後、芸能教室の世話役の大人が囃子方の人ではなくなり、平成５年頃に芸能教室がなくなった。しかし、中町では、それ以降、芸能教室に来ていた女の子も町の囃子の練習に入ってきたという。現在、中町では、囃子の練習に来た子供は、男女を問わず山に乗せることにしているという[*33]。

このように、伝承が一旦途絶えたり、途絶えかかったりした後、３町合同で曳山囃子教育を行っていることから、伝承が途絶える以前の曲目のいくつかが伝承されなくなったり、合同の教育によって新たに曲が加わったり、新たに加わった曲によって以前の曲が変型したり、古い録音が見つかって復元したり、新たに放生津や高岡市伏木などの周辺地域から取り入れたりしているうちに名称が変わっていったのではないかと想像される[*34]。海老江の曳山囃子の曲に見られる同名異曲や異名同曲はこうした過程の中で生じているのではないだろうか。

６．おわりに

海老江曳山は放生津の影響を受けており、楽器の編成や曲目に多くの類似点がみられる。その一方、海老江曳山は曳き子がよく歌い、よく踊る山である。そこから、曳山の音楽として、囃子と歌の２つの要素を組み合わせることで、曲目を３種類に分類した。放生津からの曲の受け入れも、そのままではなく、中には一部にさまざまなアレンジを施し伝承しているものもあることが分かった。また、海老江各町の共通点や相違点は戦後の伝承の危機と昭和50年代～平成初めにかけての復興の試み、そして新しいものを取り入れる柔軟な姿勢が影響していると思われる。

以上、海老江曳山の音楽的特徴を楽器と曲から概観し、曲の伝播と伝承の仕方を音楽分析によって明らかにした。もう一つの特徴は「木遣り」であるが、詳細については別稿で論じたい。

謝辞　調査にあたって射水市教育委員会生涯学習・スポーツ課の金三津英則氏、尾野寺克実氏（当時）、松山充宏氏（当時）に各町の曳山関係者との橋渡しと資料提供をいただいた。各町の保存会の皆様にはインタビュー調査の協力と祭礼調査の便宜を図っていただいた。各所より資料提供もいただき、囃子の変化を考察するうえで大変役に立った。東町、中町、西町それぞれに個性溢れる方々との出会いは、多々、想像を超えるもので、本当に楽しい調査となった。この場を借りて、皆様に深謝申し上げたい。

注釈

*1　本論は日本民俗音楽学会第28回東京大会（平成26年12月14日、東京音楽大学）における口頭発表「富山県射水市海老江・大門地区の曳山囃子」の一部とその後の調査成果と分析を加えて再構成したものである。

*2　高岡市福岡町に工房をもつ新月乃笛。「新月」の銘が入る。

*3　平成26年９月11日、海老江東町公民館、野田義彦氏（昭和33年生）へのインタビュー。30年前に、新湊は高い調子の笛だと、三味線の糸が切れやすいから調子の低い笛を使うと聞いて、三味線は使わないけれど、調子の低い笛に替えたという。

*4　平成26年８月26日、海老江中町高林氏宅、高林三智氏（昭和44年生）へのインタビュー。

*5　左手中指と薬指、右手人差し指で指孔を押さえる。

*6　石川県白山市の和太鼓メーカー（株）浅野太鼓楽

器店。

*7 富山県射水市（旧大門町）の太鼓屋。「荒定」の焼き印が付いていることが多い。すでに廃業。

*8 紺屋町・新町を除く11町が自前方式をとる。

*9 射水市教育委員会の調査報告書に「海老江曳山囃子曲目等一覧」表があるが、木遣りなどの歌は含まれていない[8)]。

*10 放生津の「雑曲」とは、「本囃子」と対になっている曲群で、角を曲がる、ご祝儀を貰うなど場面に付随する「機能的な曲」と「余興の曲」がある。

*11 中町の「勝ち鬨（どき）」には歌が付く。

*12 平成23年度に射水市教育委員会が撮影した海老江３町の曳山囃子の記録映像から、曲の長さを算出した。

*13 関原茂氏（昭和24年生）によると、本囃子は５番以上あったが、昭和50年代に清水先生へ習いに行った時に５番にしぼった、銀囃子も５番あったという。平成26年９月22日（宵山）、海老江中町公民館、関原茂氏へのインタビュー。このことから、中町の「本囃子」は昭和50年代に整理されて現在の形になったと思われる。

*14 平成26年９月10日、海老江中町公民館、高林三智氏へのインタビュー。

*15 西町の山の中に掲示される次第には、「長兵さま」となっている。平成26年９月23日に確認。

*16 平成26年12月25日、海老江中町五十嵐氏宅、五十嵐謙治氏（昭和15年生）へのインタビュー。

*17 平成26年９月22日（宵山）、海老江中町公民館、関原茂氏へのインタビュー。

*18 平成26年８月26日、海老江中町高林三昌氏（昭和11年生）へのインタビュー。

*19 表２の放生津の曲との比較は、新たな資料の分析の結果、射水市教育委員会の調査報告書の表[9)]を若干手直ししたものである。

*20 平成26年９月22日（宵山）、海老江西町公民館、竹内彦喜氏ほかへのインタビュー。

*21 平成26年８月26日、海老江中町高林氏宅でのインタビュー。

*22 射水市では観光客向けの曳山祭礼のパンフレットに、山の巡行路で見応えのある地点やイベントを「見どころ」として紹介している。

*23 平成26年８月26日、海老江中町高林氏宅、高林三智氏へのインタビュー。

*24 平成26年９月９日、海老江西町公民館、囃子方へのインタビュー。

*25 この２曲は、放生津では13町すべての曳山囃子にある。

*26 放生津の「戻り囃子」は町によってそれほど大きな違いはないため、ここでは筆者が囃子を習っている古新町の囃子の採譜を挙げる。

*27 海老江西町文化財保存会会長早瀬修一氏から提供の録音テープ。辻隆男氏による笛のみの演奏。録音年不明。

*28 平成23年９月14日、海老江西町文化財保存会会長の早瀬修一氏へのインタビュー。

*29 平成26年９月22日（宵山）、海老江中町公民館、関原茂氏へのインタビュー。関原氏は、その後、芸能学級で10年くらい笛を教えたという。

*30 平成26年９月９日、海老江西町公民館、囃子方へのインタビュー。

*31 平成26年８月26日、海老江中町高林氏宅、高林三昌氏、三智氏親子へのインタビュー。

*32 平成26年９月９日、海老江西町公民館、囃子方へのインタビュー。

*33 平成26年９月10日、海老江中町公民館、高林三智氏へのインタビュー。

*34 西町の「見渡せば」は、東町と中町の「新湊銀囃子」と同曲（笛の旋律が同じ）である。「新湊銀囃子」は放生津の「銀囃子」だが、西町では、「銀囃子」を取り入れたときに、名称を取り違えたと推測される。

引用・参考文献

1） 富山県教育委員会編『富山県の曳山』富山：富山県教育委員会、1976年。

2） 射水市教育委員会編『富山県射水市　海老江加茂神社秋季祭礼の曳山行事　大門神社・枇杷首神社秋季祭礼の曳山行事　調査報告書』富山：射水市教育委員会、2015年。

3） 前掲書、11頁。

4） 前掲書、６-10頁。

5） 小泉文夫『日本伝統音楽の研究』東京：音楽之友社、1958年。

6） 日本放送協会編『復刻　日本民謡大観　近畿篇』東京：日本放送出版協会、1993年、588-589頁。

7） 射水市教育委員会編、38頁。

8） 前掲書、34頁。

9） 島添貴美子「海老江曳山の音楽」、射水市教育委員会編『富山県射水市　海老江加茂神社秋季祭礼の曳山行事　大門神社・枇杷首神社秋季祭礼の曳山行事調査報告書』富山：射水市教育委員会、2015年、41頁。